

§ 5 気球

気球のみは測風気球以来外注で、気球製作所のものを1920年より使って居り、1927年より日本製品のみとなった。1930年に200, 300 gr, 1932年に400, 600 grができた。これらはシートゴムをガソリンで溶し dipping 法で作った臭気ふんぶんたるものであった。今日アメリカでは一足先に再び dipping に戻っていることは面白い。1935年の本台テニスコートでの飛揚の時に藤村氏が6時間かかって填めたという真剣なエピソードがある。当時は水素がシューシュー吹き出るのをラバーセメントで目張りをしたもので、目張りをしないことは一度もなかったという。1939年の爆発事故以後このような事は無くなったようだ。1935年より東亜ゴムも加わり、1937年迄日清ゴムと3社のものを使っていた。1938年からアメリカの Darex にまねて Latex を整型バスに入れて作る今日の方法になった。これについての話は高層気象第2巻第1号に詳しい。1935年の最初の飛揚時には400 gr 2コ、1938年の布佐でのルーチン観測開始当時は300gr 2コを用いたらしい。2コ使った理由は単に大きい気球が無かったからであろう。当時は発信器が600gr位、付属品が120 gr位、純浮力1120 grであった。

§ 6 陸軍のゾンデ

これについては明かにされていないが、気象台より先に科学研究所で長谷川、小関氏等が試作し、久保田商店に作らせた。湯浅氏の書いたものには気象台と同じ1932年に研究を開始したようになっている。電池は設田氏が博覧会に2次電池を出したものを目的を秘して買ったとの事で、1934年に2次電池にした。この頃明星のゾンデ

部が久保田の沢田氏により作られた。久保田氏は始めフィリップスの代理店をやっており、小型のポータブルラジオを作っていたという。湯浅氏が風呂の帰りどぶをまたいで水銀温度計のキャップ式容量を考案した。陸軍ゾンデを始めた原因は弾道気温と航空で、この年の暮に第1回の教育総監部内で教育をやり、1935年の2月に総合演習を国府津の海岸でやり、制式器材として認用された。箱はセルロイドで桐箱の気象台型に比べれば外観において非常に立派だった。気圧は白井氏による櫛型断続器によっていた。これは専ら野戦用であったために気圧を減らして2元にしたのである。海軍の方は3元のままであった。トラッキングの方は1932年頃からループアンテナを使っていたらしい。八木アンテナは1929年頃に来て、これをトラッキングに使ったのは森田氏の指導により小関氏が1941年にやったという。これは最大感度式として1950年頃迄は使われていた。

§ 7 あとがき

何しろ私個人の知識が多いから非常に不備な点が多く、他日完全なものを作る時の御参考になれば幸いだと思う。技術史は科学の進歩に必要な事は勿論であるが、それを一つの発展過程として見る必要がある。未だな事を一々羅列しても意味が無いが、発展過程として重要となった事柄は些細な事でも意義は大きい。こゝに技術史の難しさがある、又真相というものは報告物には現れていない事があるのでどうしても当事者に語らせる必要がある。技術史を作るためにはもっと多くの努力が為されて良いのではあるまいか。(1955, 6, 19)

(中央気象台)

書 評

杉浦明平著 岩波新書 ¥100
ルボルタージュ 台風十三号始末記

大分前から広告が出ていたので、発売とともに早速一本を求め、例によって電車の中から読みだして、一晩で読んでしまった。むかし学生だったころ、岩波文庫を片っぱしから電車の中で読んだが、ここ二、三年来の新書版の流行は、サラリーマンや学生の大多数が、毎日1時間なり2時間なり電車を通うことに関連がありそうだと、ひそかに、にらんでいるんだけど、どんなものでしょうか。

内容は2部に分れていて、第1部は天然現象の記述、第2部は社会現象の記述である。著書が主力をおいているのは、もちろん第2部の方で、第1部の方はめんどくさい人に読んでもよいと断っているが、第1部の方も興味深い。著者自らの現地録音であるから迫力がある。

タンスのひっくり返りかたなど、これはその瞬間を自分の眼で見ていた人でないと書けないであろう。

第2部の方は、つぶれなかった小学校をぶつつぶして台風引っかけようとし、それがバテてテンヤワンヤとなり、結局また建ててしまうお話しで、著者得意のユーモラスな筆致で淡々と記述した諷刺である。「もちろんすべてが書かれているわけではない。が書かれていることは、若干のアダプテーションがおこなわれていることを別とすれば、かなりの正確度をもっているはず」と、まえがきに注意してある。

一つの台風と、その台風の通過した一つの海への町と、その風と町の中に生きてゆく人間を観測して、日本の台風と日本の社会と日本人の一つの断面が鮮明に解析される。すぐれたルボルタージュと言えよう。文中チョクチョク「いい子」になって登場する著者は共産党員であるが、共産党嫌いの方がお読みになっても、決して不快を感じられることはないであろう。

(久米庸孝)